

「日本宗教」第7回

## 一神教と多神教 宗教の多元化と多元主義

## リーディング・アサインメント

『宗教のポリティクス』

第四章「一神教と多神教をめぐるディスコース  
とリアルポリティーク」

第五章「宗教の多元化と多元主義」

(89-149頁)



小原克博

『一神教とは何か——キリスト教、ユダヤ教、  
イスラームを知るために』

平凡社新書、2018年



## 一神教と多神教

## 一神教と多神教 Overview

- 一神教と多神教をめぐるディスコース  
——日本における動向を踏まえて
- オリエンタリズム、オクシデンタリズム、  
リバース・オリエンタリズム
- 見えざる偶像崇拝
- 構造的暴力と直接的暴力
- まとめ

## 日本における動向

### ・梅原 猛

– 「私は、かつての文明の方向が多神教から一神教への方向であったように、今後の文明の方向は、一神教から多神教への方向であるべきだと思います。狭い地球のなかで諸民族が共存していくには、一神教より多神教のほうがはるかによいのです。」

(『森の思想が人類を救う』小学館、1995年、158頁)

## 日本における動向

- 「**「千と千尋の」**精神で一年の初めに考える」  
(『朝日新聞』2003年1月1日、社説)
- 「文明の対立」が語られている。背景にあるのはイスラム、ユダヤ、キリスト教など、神の絶対性を前提とする一神教の対立だ。(中略) いま世界に必要なのは、すべて森や山には神が宿るという原初的な**多神教**の思想である。そう唱えているのは、哲学者の梅原猛さんだ。古来、多神教の歴史をもつ日本人は、明治以降、いわば**一神教の国**をつくらうとして悲劇を招いた。そんな苦い過去も教訓にして、日本こそ新たな「八百万の神」の精神を發揮すべきではないか。

## 【復習】「近世の宗教」より 異質なものに対する対応の歴史

- キリスト教に対する憧れと恐怖
  - 虚像と実像の混在
- 禁制以降、「切支丹」のイメージが貧困化し、虚像が増殖していく。
- 今日の「一神教 vs 多神教」のディスコースにもつながっていく。

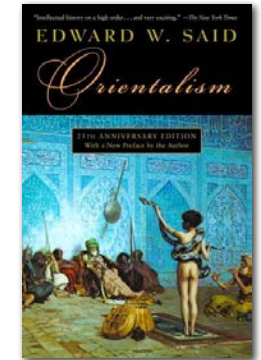
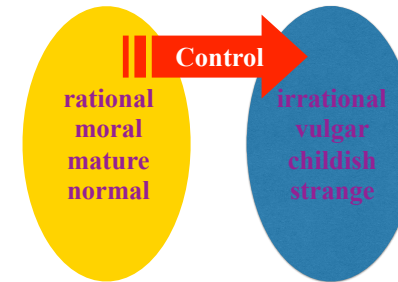
## 一神教と多神教をめぐるディスコース

1. ユダヤ教・キリスト教・イスラームは唯一の神を信じる宗教であるから、対立・衝突を避けることができない。
2. 戦争や自然破壊など、現代世界の問題は一神教（文明）に帰するところが多く、日本の多神教（文明）こそが一神教的思考の限界を乗り越え、問題解決に貢献すべきである。
3. 一神教は排他的・独善的・好戦的・自然破壊的であるのに対し、多神教は寛容・協調的・友好的・自然と共生的である。

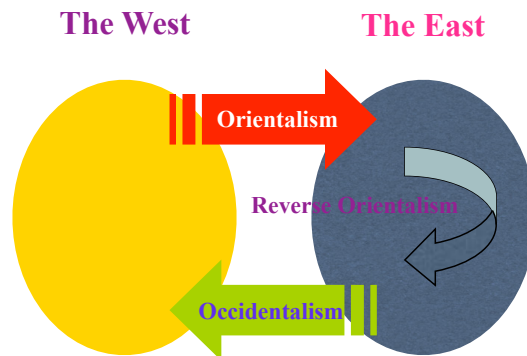
## オリエンタリズム (Orientalism)

Westerners

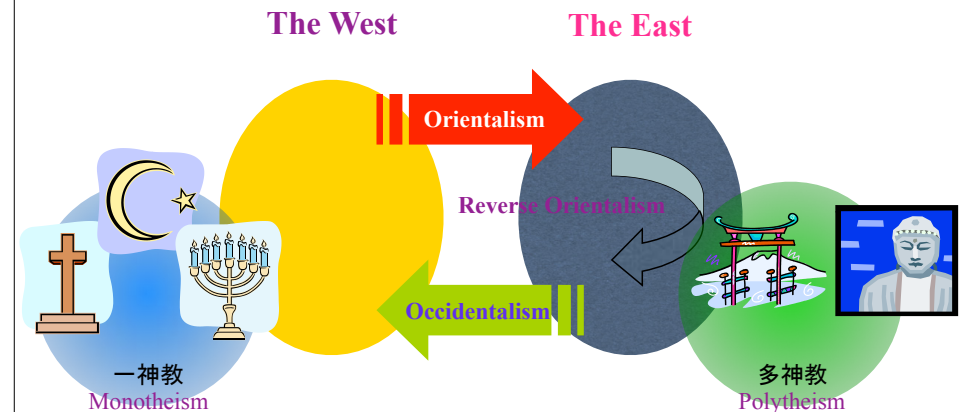
Orientalists



## オクシデンタリズム、リバース・オリエンタリズム



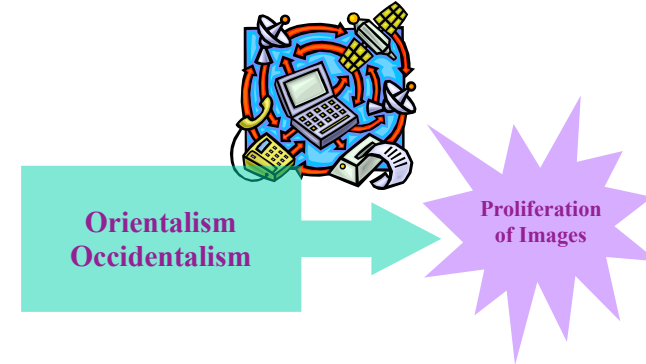
## オクシデンタリズム、リバース・オリエンタリズム



## 補助線としての「見えざる偶像崇拝」

- ヘブライ語聖書は、異教の神々への礼拝をアヴォーダー・ザーラー (Avodah Zarah) と呼び、目に見える偶像 (pesel) に限定していない。
- 偶像：支配の象徴 (例：古代世界における王)、人間の欲求 (欲望) の投影と増殖。
- 金・銀・石などで刻まれた偶像が担っていた象徴的力は「見えざる偶像」へと容易に転化される。

## 見えざる偶像崇拝



## 見えざる偶像崇拝

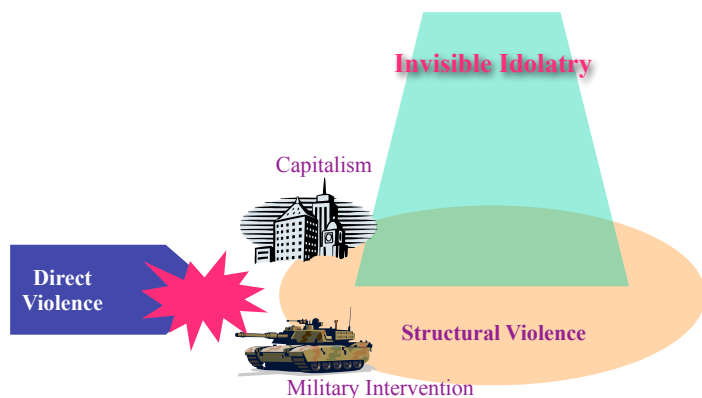


## 偶像崇拝の現代的意味

### ・パウル・ティリッヒ (Paul Tillich)

—偶像崇拝は、予備的関心を根源的関心にまで高めることである。本質的に制約を受けているものを無制約的なものと考え、本質的に部分的なものを普遍的なものにまで高め、本質的に有限なものに無限の意味を与える (現代の宗教的民族主義の偶像崇拝は最も良い例である) (『組織神学』原著1951年)。

## 構造的暴力と直接的暴力



## 現代における偶像破壊 (iconoclasm)

### ・バーミヤンの仏像破壊 (2001年3月12日)

-見える「偶像」として



### ・The World Trade Center (2001年9月11日)

-資本主義の富と暴力を体現した「偶像」として



### ・The Pentagon

-軍事力を体現した「偶像」として

絶望と歓喜を引き起こす

## ま と め

- 日本における一神教と多神教をめぐるディスコースは、**オクシデンタリズム**と**リバース・オリエンタリズム**の複合体 (→**見えざる偶像崇拜**) として、特定のイメージを拡散させ、**構造的暴力**となる危険性を持っている。
- 軍事的攻撃 (**直接的暴力**) により「悪」を根絶することを目指すよりも、**構造的暴力** (→**見えざる偶像崇拜**) を認識し、それを抑制・改善していかなければならない。
- 一神教的な考え方と多神教的な考え方を排他的・敵対的にならない形で関係づける必要がある (→多様性の認識)。

## 宗教の多元化と多元主義

# Overview

- 導入的事例——日本の新宗教
- 宗教の多元化と宗教多元主義
- 「宗教の神学」「宗教間対話」における類型論
- 排他主義、包括主義、多元主義
- 多元主義モデルの問題点
- 包括主義および排他主義の再考
- まとめ

# 新宗教について

## 宗教ブームの変遷

黒住教、1814年

- 第1次宗教ブーム** 江戸時代末期(1800年代~)  
仏教や神道、地域の習俗的信仰などの教義や儀礼をさまざまに取り込んだ庶民信仰(民俗宗教)を背景に、その影響を受けた天理教(1838年)、金光教(1859年)などが創設される
- 第2次宗教ブーム** 明治時代末期(1890年代~)  
大本(1892年)、霊友会(1923年)、ひとのみち(現パーフェクトリパティ-PL)教団、1930年)といった新宗教が生まれるが、国家の統制や干渉を受ける
- 第3次宗教ブーム** 戦後(1945年前後)  
敗戦後、当局の監視を逃れて新宗教が拡大。生長の家(1930年)、世界救世教(1935年)、立正佼成会(1938年)など。また、天照皇大神宮教(1946年)、ピーエル教団(現PL教団、1946年)、創価学会(1948年)がこの頃誕生
- 第4次宗教ブーム** 高度経済成長期(1970年代~)  
「貧や争」の解決を認む立正佼成会や創価学会などが勢力を伸ばす。高度成長により豊かな社会が実現し始めると、霊現象や奇跡など新しい教えを認む新宗教も出現。世界真光文明教団(1963年)、阿含宗(1978年)、宗教真光(1978年)、ジーエルエー(現ジーエルエー総合本部、1970年)などが誕生
- 精神世界ブーム** 1980年代~  
若者層のオカルト志向、精神世界ブームなどを背景に、幸福の科学(1986年)、オウム真理教(1988年)などが誕生。また近年では、テレビ番組が火付け役となり「スピリチュアル」が拡大



週刊『ダイヤモンド』(特集「宗教とカネ」)2010年11月13日号より

## 20大新宗教の系譜



## 主な新宗教

名称	設立年	系統
黒住教	1814年	神道系
天理教	1838年	神道系
金光教	1859年	神道系
大本	1892年	神道系
霊友会	1920年	仏教系
創価学会	1930年	仏教系
生長の家	1930年	混合系
真如苑	1936年	仏教系
立正佼成会	1938年	仏教系

## 新宗教の特徴

- 神道・仏教・民俗宗教などに起源を持ちつつ、分派し教団を形成。
- 開祖（教祖）のカリスマ性が大きな役割を果たす。
- シンクレティズム（宗教混交）を積極的に活用。
  - 例：大本では「万教同根」を唱える。
- 1980年代以降の新宗教では、科学との親和性を強調。

## 宗教の多元化と宗教多元主義

- 世俗化および宗教の**多元化 (religious diversity)**
- 一神教と多神教の関係（**一と多の関係**）
  - 異なる宗教同士をどのように関係づけるのか
- 方法論としての**宗教多元主義 (religious pluralism)**

## 「宗教の神学」 「宗教間対話」 における類型論

- 排他主義 (exclusivism) : 救いは自宗教においてのみ
- 包括主義 (Inclusivism) : 他の宗教にも救済の可能性
- 多元主義 (pluralism) : すべての宗教は基本的に対等

## 排他主義

- 伝統的なカトリックの宗教理解——「教会の外に救いなし」
- プロテスタントの保守派
- 特 徴
  - キリスト教と他宗教との間の「断絶」を強調
  - 聖書の権威を強調——逐語靈感説
    - 「わたしは道であり、真理であり、命である。わたしを通らなければ、だれも父のもとに行くことはできない。」（ヨハネ14:6）
- キリスト論を強調——K・バルトへの言及

## 包括主義

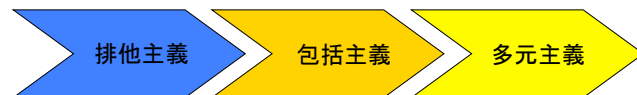
- 第二バチカン公会議以降のカトリック
- 宣言「我らの時代に」（Nostra Aetate）で他の宗教の真理性を否定しないことを確認
- 1960年代以降の世界教会協議会（WCC）における他宗教理解
- 特 徴
  - 救済は他の宗教においても可能（神の恵みの普遍性）
  - キリスト教と他宗教との間には包括的な上下関係があると考えられる。

## 多元主義

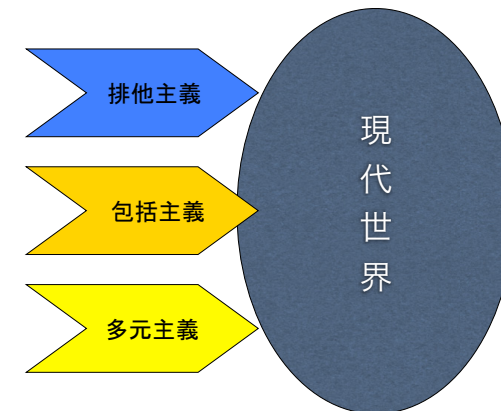
- 宗教的多元性は恒常的なものであり、それはいかなる単一の宗教にも取って代えられることはない。
- 諸宗教の中には固有の真理がある（ただし、すべての宗教が救済的意義を持っているわけではない）。
- いかなる宗教も、最終的・絶対的・普遍的な真理を保持していると言うことはできない。
- キリスト教信仰にとってイエスは独特の意味を持っているが、その独自性は排他的な形で優越性・超越性と結びつけられるべきではない。

## 多元主義モデルの問題点

- 置換主義（supersessionism）
- 例：ユダヤ教とキリスト教の関係  
「古いイスラエル」と「新しいイスラエル」  
「旧約聖書」と「新約聖書」



## 多元主義モデルの問題点





## 包括主義の再考

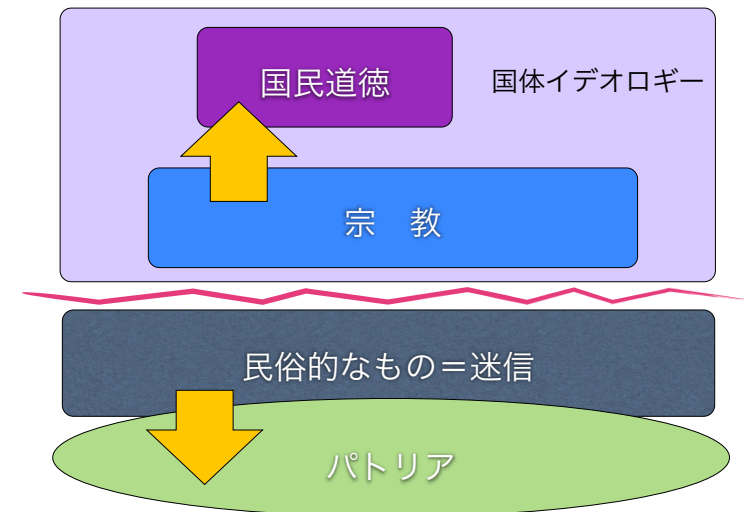
- 包括主義者は、他の宗教に対する肯定的な関心を持っている。
- 神仏習合とその近代の変容
  - 明治政府は神仏習合を否定し、神仏分離を実行。
  - 神仏習合の包括主義から国体イデオロギーの包括主義（神仏補完）へ
- イスラームにとっての「啓典の民」（ユダヤ教徒・キリスト教徒）

## 排他主義の再考

- 「ファンダメンタルなもの」の探求
- 西洋的近代への批判的応答として
- 「原理主義を定義づける反近代の衝動は、したがって**プレモダン**ではなく**ポストモダン**のプロジェクトとして、よりよく理解されるだろう。**原理主義のポストモダン性**とは、何よりもヨーロッパ-アメリカによるヘゲモニーの武器としての**近代性を拒絶**するところにある——そしてこの点において、**イスラーム原理主義**はじっさいに範例的なケースである——ことが認識されなければならない」（ネグリ&ハート『帝国』2003年）。
- ナショナリズムへの抵抗の力としての正統主義者（排他主義者）

## まとめ

- 信念を持ちながら、自らの立場を絶対視しないために
- 「他者性」の認識、他者との「対話」
- 宗教の相互関係の類型論にとどまらず、宗教概念からこぼれ落ちてきたものに着目
- 「民俗的なもの」
- 国家（＝「想像の共同体」）とパトリア（郷土）



## まとめ

- アイデンティティ・ポリティクスの罫に注意する
- 文化的・宗教的アイデンティティを強調することによって、「異質な他者」をあぶりだそうとする傾向が強まっている（特にヨーロッパで）。
- アイデンティティの多様性に対する認識を深める必要性